

江戸時代の村と玉川上水の分水

①恋ヶ窪村分水と玉川上水

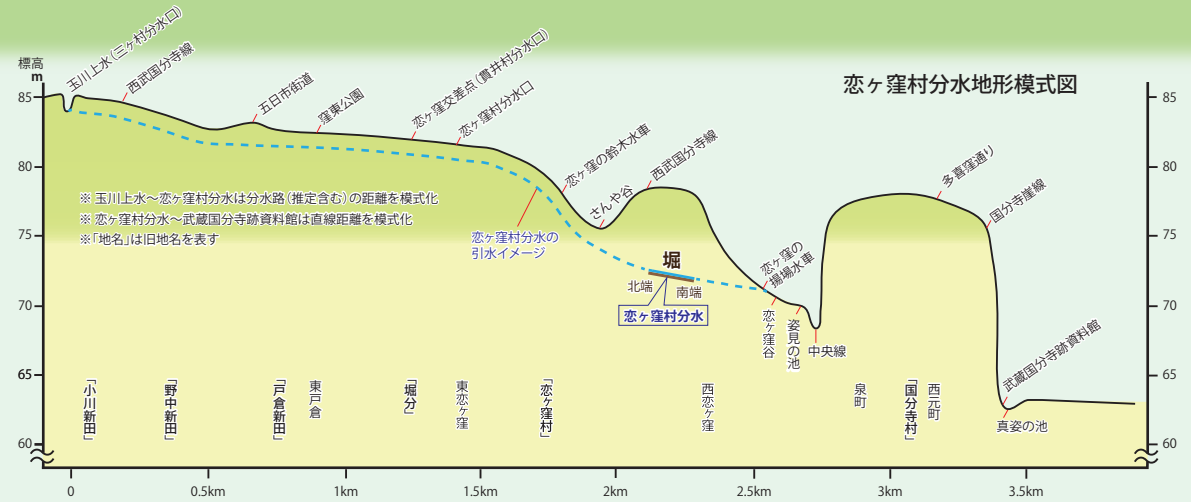
玉川上水は、江戸幕府の公式記録である『上水記』によると、^{じょうおう}承応2年(1653)4月から11月の間に開削されました。ゆるやかな武蔵野台地上を羽村の取水口から砂川村を通り、四谷大木戸まで約43kmにわたる大工事でした。

そのわずが4年後の明暦3年(1657)、国分寺村・恋ヶ窪村・貫井村(現小金井市)が玉川上水から水田用水を引水することを願ひ出て許可され、合同の分水口が設けられました。この分水は「国分寺村分水」や「国分寺村外ニヶ村組合分水」と呼ばれ、開削当初は、上水新町3丁目付近の玉川上水から直接取水し、現在の窪東公園の西側を南下して恋ヶ窪交差点で貫井村分水と分かれ、東恋ヶ窪五丁目交差点東側で国分寺村分水と恋ヶ窪村分水に分かれるルートでした。このような玉川上水分水は武蔵野台地の至る所を流れていました。その後、明治3年(1870)に分水口の統廃合が行われ、南野中新田分水(現砂川用水)から引水されています。



西恋ヶ窪の水田風景(昭和33年)

水は昭和45年頃まで流されていたと見られ、恋ヶ窪村の田園風景を構成していました。また、かつて恋ヶ窪交差点の東側一帯は「堀分」という地名でした。



恋ヶ窪村分水周辺地形図(昭和30年)



恋ヶ窪村分水周辺空撮写真(昭和22年)

②恋ヶ窪村分水の開削

恋ヶ窪村は、中世には鎌倉街道が通る交通の要衝に位置しており、近世初頭には村が成立していたと考えられます。恋ヶ窪村分水は村の農業用水の確保が目的でしたが、その開削には、さんや谷と恋ヶ窪谷にはさまれた台地をひとつ越えなければなりません。当時、トンネル工法ともいえる^{たいたい}胎内堀はまだ技術的に確立されておらず、この段丘を通すために大規模に掘り込む必要があったのです。

分水の開削により、恋ヶ窪村は約3斗9升から8斗8升へと倍以上の石高となり、次第に高低差を利用して水車経営をする農家(鈴木水車)などもみられました。

③発掘調査と整備公開

長く空堀の状態で保存されていた恋ヶ窪村分水は、平成29年に緑地整備に伴う発掘調査が行われました。分水の堀割は逆台形状で、堀幅の上面で約6~9m、深さは約5.2~5.5mを測ります。当初から玉川上水に匹敵するほどの規模で掘削され、堀の底部から50cmほどの深さまで水が流れていた^{さかのぼ}痕跡を確認しました。通水のため分水として機能していた時期に遡る遺物は少なかったものの、江戸時代の植木鉢やすり鉢、陶磁器の皿が数点発見されました。また、空堀となつてからは、コーラ瓶などが投棄されていることがわかりました。

調査の結果、恋ヶ窪村分水の大規模な堀割は当時の姿を残す土木遺産として貴重であることから、明暦3年(1657)の開削から360年にあたる2017年に市重要史跡に指定をし、翌年7月には恋ヶ窪用水路周辺緑地としてオープンしています。

④市内を流れる分水・用水

今回指定したのは西恋ヶ窪に残る分水の堀割ですが、市内には恋ヶ窪村分水以外にも江戸時代を通して多くの分水路が設けられていました。五日市街道に並行して通水している南野中新田分水(砂川用水)は現在でも見ることができ、西町にはトンネル状の胎内堀が残されています。

市内には分水を利用した水車の痕跡、水の祭祀に係る寺社などの文化財が多く残されており、今後も市はそれらの保護と活用を進めていきます。



市内における分水関連図